



大杉谷国有林からの手紙



48通目 ～大杉谷に住む、日本固有の動物たち～ 2020年11月

暑い夏の季節が終わり、秋らしい涼しい季節となってきました。

大杉谷も最近羽織り物が必須な肌寒い日が続いて、動きが鈍くなりがちですが、対照的に動物たちは、秋の実りを享受するため、今日も元気に活動しています。

そこで今回の大杉谷からの手紙では、大杉谷に住む動物の中でも日本固有種のヤマドリとアナグマについてご紹介します。

(1) 尾が長い日本固有種「ヤマドリ」

山で幾度となく林道上に現れては、そしらぬ顔でとことこ林道脇に去って行ったり、山の中を歩いていると急に飛び立ったりしてこちらをびっくりさせる赤褐色の鳥（写真1）を大杉谷では良く目にします。以前、運転中に7回も林道に飛び出てきた事もあり、車の速度を抑えていても心臓に悪い子達です。

そんな彼らは「ヤマドリ」（写真1）です。昔話の「桃太郎」に出てくるキジの親戚となり、雌雄で体の大きさや色が異なります。



写真1 尾羽が長い雄のヤマドリ

特筆すべき特徴は、写真1でも見られるように、雄の平均体長約125cmの半分以上を占める長い尾羽です。若鳥よりも成鳥の方が尾も長く個体差がかなりありますが、大きいものは尾だけで約95cmもあります。そのため、雄は林道からもすぐに視認することができますが、雌は体長が平均55cmほどで、尾も短く色も茶色で、動かなければ地面や落ち葉の塊と見間違ふほど、とても見つけにくいです。

尾羽が長い方が外敵に狙われるリスクが高く、生存に不利だと考えられますが、幾年月を経て、尾の長い雄が強い配偶者として選択された結果、尾が伸びたのでしょうか？謎が深まりますね。

もう一つのヤマドリの特徴としては、ほとんど鳴かずに翼をバタバタとはばたかせ、音を立てる「ほろ打ち」を行うことが挙げられます。

写真2は、ほろ打ちを行った後の写真でじっとこちらを見えています。



写真2 「ほろ打ち」の後、じっとこちらを見ている

ほろ打ちとは、縄張りの意思表示や求愛等のために良く使用されるため、「ここは僕の縄張りなのに…、早くどこかに行かないかな〜？」と思っているのかもしれませんがね。あまり長居をしてもかわいそうなので、早々にその場を後にしました。

(2) 古今で意味の同じ「山鳥の尾」

ヤマドリは山間に多く生息している事から、あまり身近に感じる事は少ないですが、この種はヤンバルクイナ（沖縄の山原地域固有種で国の天然記念物）等と同じ数少ない日本固有種であり、その存在は奈良時代の人にとっては身近な存在だったようです。奈良末期に編纂（へんさん）されたといわれている万葉集曰はく（いわく）、

「思へども 思ひかねつ あしひきの 山鳥の尾の 長きこの夜を／読み人しらず」

「あしひきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む／読み人しらず」と残っています。

この2つの和歌で「山鳥の尾」という単語は、「長い」という単語を導く枕詞（まくらことば）として使われています。言葉の意味は時間を経て変わることもありますが、「ヤマドリの尾は長い！」と感ずるのは、奈良時代も現代も全く違いが無いようですね。



写真3 石に前肢を置き、こちらを見ているアナグマ

(3) 穴掘り好きのニホンアナグマ

山の中を歩いていると、こちらを見上げているニホンアナグマ（以下アナグマ）（写真3）に出会いました。夜行性の動物なので昼間に会うのはかなり珍しい光景です。

国際自然保護協会（IUCN）の発行しているレッドリストの記載を調べてみると、雄の成獣で体長は平均66.8cm～78.7cm、雌で60.4cm～72.0cmで場所や個体によりかなり差があるようです。

私は写真を撮影した時が初めて見たのですが、柴犬程度の大きさなのかなと思っていましたが、想

像していたよりも大きくてびっくりしました。

アナグマの特徴はその名前の通り、穴を掘る事を得意としており、写真3で見て取れるように前肢が立派なのがわかります。この5本指の前肢を用い、地中に部屋がいくつもあつた大きな巣を作ります。穴掘りと関連したことわざに、「同じ穴の貉（むじな）」という言葉がありますが、むじなはアナグマやタヌキの事を指し、アナグマが掘つた同じ穴をタヌキ等がこっそりと使つていた事が、ことわざの由来になつているようです。

食生活は雑食で何でも食べますが、主に土中のミミズやカブトムシ等の幼虫を食べて生活しています。大杉谷でのアナグマの食に関してはデータが無いので詳しくは分かりませんが、林道の修繕に用いる土嚢（どのおう）を作るため、シャベルで湿つた土を掘ると、男性の人差し指ほどの太さの濃紺色をしたシーボルトミミズが沢山出てきます。イノシシ等との競合もありますが、困らない程度に餌は存在しています。

写真4は大台ヶ原の森を歩くアナグマです。写真を見ると体の色が薄い茶色で倒木の色と似ているので、かなり見つけにくいです（写真中央の赤丸部分）。この時も偶然歩いている姿を撮影できましたが、立木や下層植生の多い林内で動物を視認する事は至難の業で、すぐ何処かに移動して見失ってしまいました。



写真4 大台ヶ原の森を歩くアナグマ（中央の赤丸）

大杉谷国有林は全域が禁猟区で、天敵の猟師や野犬もいないため、餌もあり遮蔽物（しゃへいぶつ）も豊富な林内は、アナグマにとってのびのびと生活しやすい場所なのだと思います。

まとめ

今回ご紹介したヤマドリやアナグマを含め、大杉谷には多くの動物たちの生命のゆりかごとして機能しています。この素晴らしい自然環境や多様性を将来の世代に残す為にも前号で紹介した森林整備事業やニホンジカの個体数管理等をしっかりと行い、多様性のある森林を維持していきます。

参考文献

- ・日本林業技術協会, 森の野鳥を楽しむ101のヒント, 2004, p 12~13・ p 40~41・ p 148~149
- ・ナツメ社, パッと見わけ 観察を楽しむ野鳥図鑑, 2015, 石田光史 著, 樋口広芳 編, P27
- ・Kaneko, Y., Masuda, R. & Abramov, A.V. 2016. Meles anakuma. The IUCN Red List of Threatened Species 2016: e.T136242A45221049. <https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.N.UK.2016-1.RLTS.T136242A45221049.en>. Downloaded on 12 November 2020.
IUCNレッドリスト（ニホンアナグマ）
- ・農林水産省 野生鳥獣被害防止マニュアル-アライグマ、ハクビシン、タヌキ、アナグマ-（中型獣類編）第三章 中型獣の生態と特徴 P62~63
- ・日本林業技術協会, 森の野生動物に学ぶ101のヒント, 2003, p 50~51・ p 102~103・ p 152~153

2020年11月

編集:三重森林管理署 尾鷲森林事務所 係員
発行:三重森林管理署 尾鷲森林事務所 地域統括森林官